日本語学習者による文法項目の習得に関する一考察

—文法能力集団別の習得度の差—

フォード順子　小林典子

要　　旨

教師は、個々の文法項目の難易について、導入される時期や日頃の経験から判断して、その難易をおおまかには知っている。しかし、学習者がそれらを習得し、実際に使えるようになるのはどの段階に到達したときであるか知っているであろうか。導入される時期によって習得の時期が異なるのは当然であるが、一般的には初級段階で導入する文法項目であっても、中級あるいは上級段階にならなければ習得されない項目もある。ある段階において学習者は前進できず、足踏みをしていることがある。テスト結果を文法力に応じた集団ごとに分析することによって、どのような文法項目がどの段階で、学習者に足踏みをさせる傾向があるのかを示した。

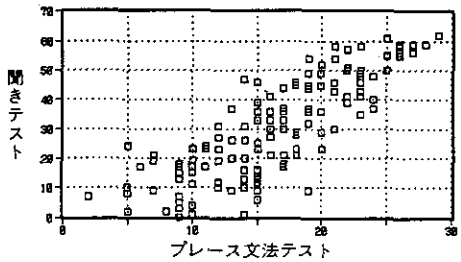
【キーワード】　文法項目　習得の段階　習得度　正答率　文法能力別集団

1．はじめに

学習者がある文法項目を習得したかどうかを、教師はテストによって知るが、一般には、学生一人一人に着目し、個人の習得具合いを、あるいは集団全体に目を向け、全体の正答率によって、全体としての習得の具合いを判断する。また一方で、教師はある文法項目の難易について、導入の時期や経験からおおまかに知っている。学生の発話を聞いていて、ある文法項目が出てくると、その学生が大体どのレベルであるか分かる。個々の文法項目は、初級から上級までのどの段階で習得されるのであろうか。

筆者らは、文法項目の音声聴取能力を計る聞き取りテスト（以後「聞きテスト」と呼ぶ）を考案し、小林・フォード（1992）で聴取能力と文法力の相関を考察したが、このテストを通して、文法項目の習得状況が項目ごとに異なる特徴を持つことに気付いた。そこで本稿では、文法能力別の4つの集団間にある習得度の差に着目し、文法項目の習得状況を分析していく。今回の分析に使用した「聞きテスト」は、筑波大学留学生センター91年秋期補講コースプレースメントテスト（以後「プレース」と呼ぶ）[1]の文法との相関係数が0.82で、また、その分布は以下の図のようであった。このことから、この「聞きテスト」で文法項目の習得について分析をすることは意義あることと考える。今回は習得パターンの大まかな分類を試み、「聞きテスト」の全問題を提示して、どの文法項目がどの習得パターンであるかを示すことを第一の目的とする。

〈図1〉文法項目の音声聴取テスト(聞きテスト)と「プレース」文法テストとの相関



2．聞き取りテストの概要

2．1　文法項目の選定

文法項目は、日本語教育学会(1991)の文法シラバスの中から初級、中級の文法項目を難易を考えて選び出したが、これは、初級、中級とも6種類の日本語教科書について特定の文法項目を扱っているかどうかを調査したものであり、本稿では初級、中級でそれぞれ3種類以上の教科書が共通して取り上げていた場合に、そのレベルに該当する文法項目として扱った。また、このシラバスに加え、日頃の聴解の授業で経験的に得ていた学生の能力を加味して、最終的に65問を選定した。基本的に単文であるが、対話形式のものも6問入れた。

2．2　テスト問題の内容と解答形式

テストは単文(一部は対話形式のもの)において、文法項目に関わる箇所をひらがな1字分(　)にし、テープを聞きながら同時に解答用紙に書かれた同じ文を目で追っていき、(　)の中に聞こえた音を書き込ませる形式のものである。なお、テープにはノイズなどは入れず、文全体が聞けるようになっている。(　)をあけた箇所は、2．1で選定した文法項目そのもの、あるいはその前後にあたる助詞(助詞の一部)、形式名詞の一部、述部の活用部分である。なお、テープはごく自然な速さで話されており、問題と問題の間は約2秒あいている。

このテストはテープを聞いて行なうという点で聞き取りテストの一種ではあるが、聞いたものの内容理解等を問うものではなく、文法項目が聞き取れるかどうかを問うテストであり、その意味においてむしろ文法のテストと考えている。ただ、一般の文法のテストと違うのは、答えが既に音声で与えられており、それを聞き取って書き込むだけでよい点にある。だが、そのためには自然な速さで話される文の意味を理解して処理できなければならない。一般のテストが時間に余裕があり、ひとつの問題に対し時間をかけて答えをひねり出すことができるのに対し、このテストではそれができず、日常実際に話されている速度での文を理解できなければ解答できない。その意味において、文法項目が本当に習得され、学習者が消化して実際に使えるようになっているかどうかがこのテストから分かるのではないだろうか。

2．3　テストの実施

被験者は、筑波大学留学生センター91年秋期補講コース「プレース」受験者137名で、「プレース」終了後、同じ場所で引き続いて実施した。

用紙は始めるまで裏返しておき、被験者が前もって問題の文を読めないようにし、被験者にはテープを聞きながら同時に目で文を追っていくように指示した。テープは途中で止めずに最後まで流すことも伝えた。

3．結果と考察

3．1　文法力別の集団

ある文法項目が（文法力）初級から上級までのどの段階で習得されるかを見るために、文法力の高低に応じた集団を作った。そこで「プレース」の文法得点が上位のものから順に25％ずつの4集団に分け、一番文法力の高い集団から順にＧ1（35人）、Ｇ2（34人）、Ｇ3（34人）、そして一番文法力の低い集団をＧ4（34人）とした。「プレース」の文法テストは30点満点で、Ｇ1は21～29点、Ｇ2は16～20点、Ｇ3は12～16点、Ｇ4は2～12点の学生から成っている。なお、各集団の平均得点（％）は、Ｇ1：23.6点（78.6％）、Ｇ2：18.1点（60.3％）、Ｇ3：14.2点（47.3％）、Ｇ4：9点（30％）である。これは筑波大学留学生センター91年秋期補講コースの「プレース」受験者を基にした4集団であるが、Ｇ4にはほとんどゼロの者から、Ｇ1には日本語で難なく研究活動を行なうことのできる者までが入っており、その意味で一般に考えられている初級から上級レベルにほぼ相当すると考えてよいと思われる。そして、この集団別に「聞きテスト」の結果を見ることによって、個々の文法項目について、どのレベルでどの程度の習得がなされるかが窺えるのではないかと考えた。

3．2　文法力別の集団による「聞きテスト」の結果

「聞きテスト」の結果と「プレース」を照合し、「聞きテスト」各65問について集団ごと（Ｇ1～Ｇ4）に正答率を出した[2)]。当然のことながら、Ｇ4からＧ1へと正答率が上がっていっている。ただし、その上がり方は一様ではなく、きれいな段階になって上がっていっている問題もあれば、ある集団間で大きい段差が生じている問題もある。また、数例ではあるが、集団間で僅かな逆転が見られるものもあった。Ｇ4からＧ1へと順に段を下がっていく（同比率でいく）のが徐々に習得されていくものであるとすると、そうでないものは、ある段階に達するまでに時間がかかる等の原因があるのであろう。Ｇ1からＧ4までの各レベル間で、ある1箇所の差が他の2箇所の差よりも大きい場合を段差があるとみなし、どのような文法項目がどのような習得のパターンを示すかを見るために、65問をＧ1からＧ4までの正答率で段差が大きく生じているところによって以下のように分類した。さらに、正答率の高低を分かりやすくするために、便宜上、Ｇ1（上級レベル）の正答率が90％以上をＡ、70％以上90％未満をＢ、70％未満をＣというように三レベ

ルに分けた。

1．集団間に特に大きな習得度の差がない問題
2．G1G2間で習得度に大差がある問題
3．G2G3間で習得度に大差がある問題
4．G3G4間で習得度に大差がある問題
5．その他

以下、65問全部を問題文、集団ごとの正答率とともに，1．～5．に分けて示し考察をしていくが、その前に、上記分類の全てに共通して、特にG1レベルにおいて正答率が低いということは次の2点を意味することを述べておく。

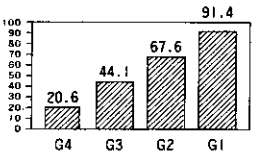
1）学習者にとって習得困難な文法項目である
2）教師の側が指導していない文法項目である

また、習得度のパターンごとに、集団ごとの正答率をグラフ化したものもひとつずつ掲げておく。グラフ、正答率とも、左から順にG4、G3、G2、G1となっている。なお、問題番号60.～65.が対話形式のものである。

（1）集団間に特に大きな習得度の差がない問題

（1－1）G4からG1まで順に上がっていっている問題

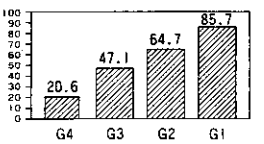
A



59.

	G4	G3	G2	G1
11. あしたは、ちょっと大事(な)用があって行けないんです。	11.8	35.3	64.7	97.1
12. ほら、あの窓(の)ところにいるでしょう。	29.4	44.1	70.6	97.1
24. それはそう(だ)と思います。	29.4	44.1	70.6	97.1
27. 留学生(に)とって筑波は住みにくいところです。	29.4	58.8	82.4	97.1
59. だから、私はそういう(ふ)うに思いました。	20.6	44.1	67.6	91.4

B

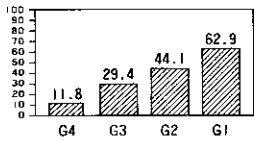


44.

44. そりゃ、外国人(の)あなたにはいいかもしれないけど。	20.6	47.1	64.7	85.7
46. 私たちも何かす(べ)きだ。	29.4	50.0	73.5	85.7

53. 作ってはみた(も)のの、あまりいいプログラムじゃなかった。	14.7	47.1	61.8	88.6

C



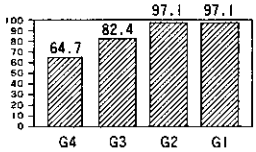
23.

9. 「TISA」っていうの(を)知っていますか。	5.9	23.5	44.1	65.7
16. 肉の色(が)変わったら、火を止めてください。	17.6	29.4	44.1	68.6
23. いま説明したのが、この茶色(に)見えるところです。	11.8	29.4	44.1	62.9

これらの文法項目は、G4からG1の間で、すなわち初級から上級にいくに従って徐々に習得されていく項目であり、特にどの段階で習得が進むという特徴を持たない項目と言えよう。

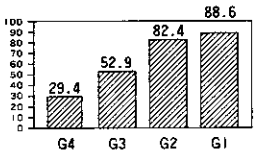
（1－2）G1G2間に習得度の差がない問題

A



4.

B



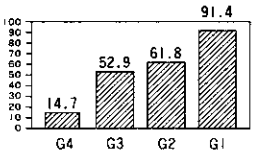
29.

	G4	G3	G2	G1
1. そこ(で)何をしてるんですか。	38.2	64.7	85.3	94.3
2. あの人は日本では有名(な)人ですよ。	67.6	82.4	97.1	100.0
4. その中(に)なに入ってんの？	64.7	82.4	97.1	97.1
29. 新聞を読んでも、本当のことはなかなかわからない(わ)けです。	29.4	52.9	82.4	88.6

G1G2間にほとんど差がない。これらは4問ともG2の正答率が最低でも82.4%あり、G2の段階で、G1と同レベルに習得が完了していると言える。

（1－3）G2G3間に習得度の差がない問題

A

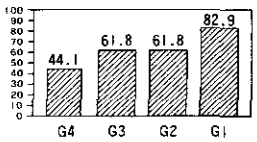


61.

	G4	G3	G2	G1
61. だれ(と)いっしょに出かけたんですか。	14.7	52.9	61.8	91.4

	62. せんたく(と)かはしますけど、そうじはしませんね。	26.5	50.0	61.8	91.4

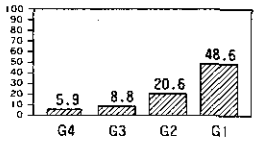
B



55.

22. 来週の会議については、あとで(ご)連絡します。	20.6	52.9	55.9	74.3
34. アルバイトっ(て)いえば、このあいだの話、もう決まった？	26.5	44.1	50.0	74.3
35. 子ども(に)なんかわかるわけないだろう。	32.4	50.0	58.8	77.1
55. あいつ、酒飲んで寝ちゃっ(て)さ。	44.1	61.8	61.8	82.9

C



40.

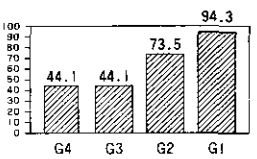
40. あの人、結婚しない(ん)じゃないの？	5.9	8.8	20.6	48.6

G２G３間に習得度の差がない、すなわちG４の段階からG３の段階へは習得度が上がるが、G１の段階へとさらに上がるのは順調にいかず困難がある項目と言えよう。B、Cレベルの問題は中級段階で学ぶ学習項目ではあるが、習得がこのグループに行きわたるのは容易ではないと考えられる。特に40. はG１の段階になっても習得困難であることを示している。

（１－４）G３G４間に習得度の差がない問題

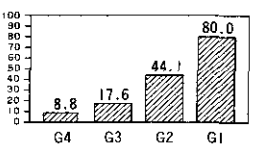
	G４	G３	G２	G１
A				
14. あそこに地図がはって(あ)りますよ。	44.1	44.1	73.5	94.3
58. 人口が増えるに(し)たがって、住みにくくなってきた。	26.5	38.2	67.6	91.4
B				
6. あのグリーン(の)スカート、いいなあ。	14.7	26.5	58.8	88.6
17. 彼ったら、えらそう(な)ことばかり言って。	5.9	17.6	47.1	85.7
30. 部屋代は東京(ほ)ど高くないです。	0.0	8.8	47.1	77.1

A



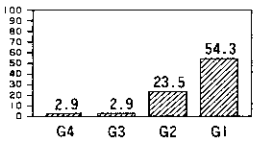
14.

B



49.

C



39.

49. それだけで終わりそう(も)ないですね。	8.8	17.6	44.1	80.0
15. 好きな人(で)もいるの？	5.9	0.0	20.6	42.9
18. きのうは一日中そうじ(さ)せられて、大変だった。	2.9	8.8	26.5	54.3
39. いまの(ま)までだいじょうぶでしょう。	2.9	2.9	23.5	54.3
41. ゴミの問題はひどくなって(い)く一方だ。	20.6	14.7	41.2	62.9

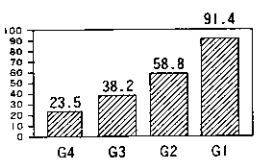
Ｇ４の段階からＧ３の段階へは習得度が上がらず、Ｇ２の段階になって上がる。すなわち、学習の初期段階において習得が困難であり、足踏みをする項目と言えよう。

（２）Ｇ１Ｇ２間に顕著な習得度の差がある問題

ここに分類した文法項目は、日本語にかなり慣れてから、すなわち他の文法項目が習得され文法力が上級レベルに達した段階でなければ習得されにくい項目と言えよう。

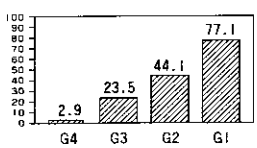
（２－１）Ｇ４～Ｇ２は順に上がっていっている問題

A



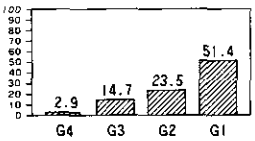
31.

B



32.

	Ｇ４	Ｇ３	Ｇ２	Ｇ１
31. これからはもっとがんばら(な)きゃ。	23.5	38.2	58.8	91.4
26. 会議があったこと、すっかり忘れ(て)た。	2.9	23.5	35.3	77.1
28. きょうはもうそのぐらい(に)して、早く帰ろう。	8.8	23.5	47.1	80.0
32. 出かけ(よ)うとしたら、電話がかかってきた。	2.9	23.5	44.1	77.1
60. ええと、あそこに立っている人(が)田中さんです。	14.7	32.4	47.1	74.3
65. うん、きのう新聞(に)出てたよ。	17.6	29.4	50.0	80.0

C 

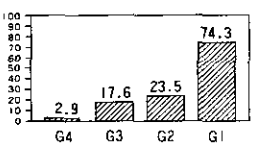
8.

8. 木村先生に会(え)ればいいのですが。　2.9　14.7　23.5　51.4

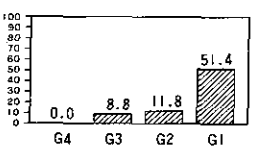
G4からG2までは同比率で習得がなされているが、G1の段階に達するのは困難である。G1G2間に習得度の大差がある分、正答率を見るとG1では（特にA、Bレベルにおいては）決して低くないのだが、G2以下で低いのが目立つ。8.の「木村先生に会えればいいのですが。」は、「～ればいい」、可能形は共に初級の文法項目であるが、それらが組み合わさった場合高度になってくる[31]。

（2－2）G2G3間に習得度の差がない問題

	G4	G3	G2	G1
21. 毎日手紙を書く(こ)とにしよう。	2.9	20.6	29.4	74.3
36. 必ずしもよくなるとは(か)ぎらない。	2.9	17.6	23.5	74.3

B 

36.

C 

50.

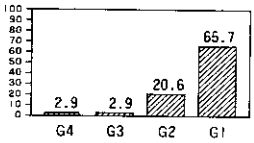
45. 今後それをどのように証明できる(か)が、最大のポイントとなります。　5.9　32.4　23.5　68.6

50. 私に言えない(よ)うなことでもあるの？　0.0　8.8　11.8　51.4

G1においても困難な文法項目ではあるが、G4からG3へと習得度が上がってもG2の段階で順調に上がらず、G1の段階で習得されるようになるものと言える。21.の「～ことにする」については、母音の無声化も影響していると思われるが、中級段階では習得困難な項目のようだ。また、45.も初級の文法項目ではあるが、理解と実際の使用とにかなりの差がある項目で、フォード（1992）では「か」を聞き落とす誤聴が頻繁に見られたことを指摘したが、学習者の発話においても「か」が落ちることはわれわれ教師の経験とも一致する。

（２－３）Ｇ３Ｇ４間に習得度の差がない問題

C



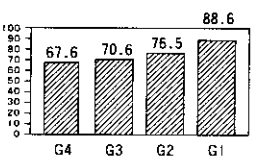
47.

	Ｇ４	Ｇ３	Ｇ２	Ｇ１
25. 何やり始める(か)と思ったら、なあんだ。	0.0	8.8	26.5	60.0
47. うん、思った(よ)りずっと進んでるな。	2.9	2.9	20.6	65.7
51. 早く国へ帰りたいなあなん(て)思ったりします。	11.8	11.8	23.5	62.9
57. いやだけど、どうしてもやら(ざ)るをえないんだ。	0.0	0.0	8.8	34.3
63. 自転車に乗って(て)、ころんじゃった。	2.9	2.9	11.8	54.3

（２－２）と同様、Ｇ１においても困難な文法項目であり、正答率は全てＣレベルである。文法項目を見ると、25.「(疑問詞）～か」、47.「動詞＋より」、51.「なんて」、57.「～ざるをえない」、63.「～ていて～」であり、25. 以外は初級の文法項目ではないのがまず分かる。25. は（２－２）の45. と同じ問題である。47. の「より」は「名詞＋より」は習得が早いが、「思ったより」となるとＧ１の段階でも正答率は65.7%である。また、63. に関して、「～て」には継起、理由など様々な用法があるが、「～ている」というように、ある状態にある時に後件のことが起こったという用法は困難なようだ。

（２－４）Ｇ２～Ｇ４間に習得度の差がない問題

B



7.

	Ｇ４	Ｇ３	Ｇ２	Ｇ１
7. 指導教官の先生(に)はもう会いましたか。	67.6	70.6	76.5	88.6

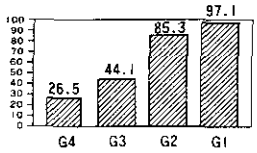
Ｇ１Ｇ２間に習得度の差がややあるが、Ｇ４でかなり習得が行きわたるために、Ｇ２～Ｇ４間にはほとんど差がない。学習を始めて早い段階でよく習得されていると言える。

（3）Ｇ２Ｇ３間に顕著な習得度の差がある問題

（3）に分類した文法項目は、中級後期で習得が急速に進むと見なせる。

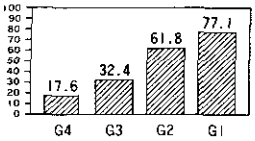
（3－1）Ｇ４Ｇ３、Ｇ２Ｇ１間は順に上がっていっている問題

A



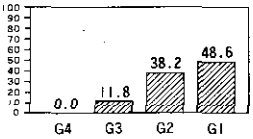
5.

B



48.

C



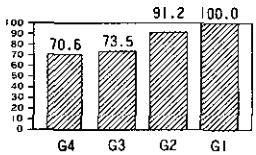
13.

	Ｇ４	Ｇ３	Ｇ２	Ｇ１
5. となりの人(に)教えてもらったんです。	26.5	44.1	85.3	97.1
10. あのコーヒー(の)おいしい店、名前何だっけ？	38.2	47.1	79.4	94.3
48. 就職した(か)らといって、勉強が終わったというわけじゃないよ。	17.6	32.4	61.8	77.1
52. すみませんが、ちょっと手伝っていただ(け)ませんか。	11.8	32.4	64.7	80.0
13. 郵便局のところ(を)曲がってください。	0.0	11.8	38.2	48.6
37. うちの母も、もう60(だ)し。	5.9	23.5	50.0	68.6
38. これはうちの問題(で)ありまして、そちらには関係のないことです。	11.8	26.5	50.0	60.0

上記の文法項目はＧ３とＧ２の間に段差が見られ、中級後期にならなければ習得されにくい項目と言えよう。５．の「～に～てもらう」という文法項目は初級の項目であるが、実際に学習者の中で落ち着くのはＧ２の段階まで待たなければならないようだ。13．の「を」について、この正答率の低さは、音的に「を」が前後の音に融合されて聞き取りにくいということもある（（１－１）の９．参照）が、被験者の解答を見ると、「で」、Ｇ３Ｇ４では「が」が少なからずある。「が」については、文の意味を理解しないまま、アクセントの上でピッチが高くなる「曲がってください」の「が」を拾ってしまったのであろうか。

（3－2）Ｇ３Ｇ４間に習得度の差がない問題

A



20.

	Ｇ４	Ｇ３	Ｇ２	Ｇ１
19. 約束してたの(に)来なかった。	23.5	26.5	64.7	91.4
20. 旅行の申し込み書なんですけど、これ(で)いいですか。	70.6	73.5	91.2	100.0

54. 私のこと聞いたんでしょう、彼(に)。 61.8 58.8 88.2 97.1

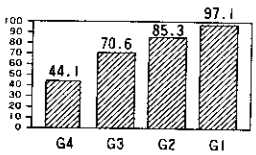
早い段階で習得されやすい項目のようで、全てAレベルであるが、特にG1の正答率が高いのが目を引く。

(4) G3G4間に顕著な習得度の差がある問題

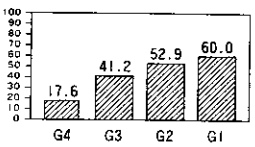
学習のごく初期の段階で習得されにくいが、初・中級の段階で習得が進み始める項目である。

(4－1) G3～G1は順に上がっていっている問題

		G4	G3	G2	G1
A	3. 今度、映画見(に)行かない？	44.1	70.6	85.3	97.1
C	43. 今度のアパート、場所(は)いいんだけどね。	26.5	41.2	58.8	51.4
	64. じゃ、あしたどこ(か)行かない？	17.6	41.2	52.9	60.0

A


3.

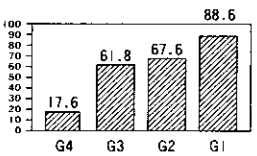
C


64.

3．でG3以上は正答率も高く、またG1まで順に正答率が上がっていっているが、G4では44.1%と低い。「～に行く」という文法項目をG4段階の学習者はまだ習得していないと言える。

(4－2) G2G3間に習得度の差がない問題

		G4	G3	G2	G1
B	33. 君の(せ)いで遅れちゃったよ。	17.6	61.8	67.6	88.6

B


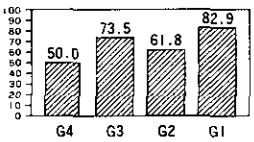
33.

G4からG3にかけては習得度に大きな段差を見るが、G3G2では差が見られない。初級から中級にかけては習得する学習者が多いが、中級段階では学習する機会を失っているのか、G1の段階に達するまで待たなければならない。

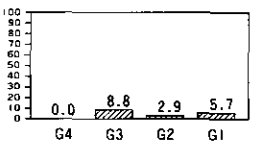
（5）その他

集団間に差の見られない問題である。

		G4	G3	G2	G1
B	42. はやく行っ(た)って、なんかもらえるわけじゃないし。	50.0	73.5	61.8	82.9
C	56. この調子なら、おれ、どんどん読(め)ちゃいそう。	0.0	8.8	2.9	5.7



42.



56.

56. は録音の音の悪さも影響しているかと思われるが、G1～G4を通して極端に正答率が低く、G1～G4の間で僅差の逆転があるものの、全員が同様にできておらず差がないと見なしてよいと思われる。詳しくはフォード(1992)で言及したが、自分自身のことについて予測の「～そうだ」を使う場合は「無意志形＋そうだ」となることを習得していないのが主原因かと思われる。42. は学生の解答を見ると、G2で「た」を「だ」と書いているのが多かったが、「～た(だ)って」という表現を習得していればこのような間違いは起こらないはずである。

また、集団間での正答率の逆転に関しては、56. 42. 以外にもいくつかあったが、いずれも僅差であり、集団を越えての逆転は56. のみである。このテストが答えが与えられているために、その文法項目を知らなくても音声のみ聞き取るのに成功する場合もあり、そこに原因していると考えられる。

5．おわりに

以上、文法力に応じた集団ごとに聞きテストの正答率を観察してきたが、すべての文法項目が一様に、文法力に比例して習得されていくわけではないことが分かった。フォード(1992)では、聴解ディクテーションの「誤聴」分析から、学習者がどんな文法項目に困難を感じているかについて考察を行なったが、それらの文法項目に対して、どのレベルの学習者が困難を示しているかを本稿で明らかにした。

集団間で習得度の差がない文法項目((1－2)、(1－3)、(1－4)、(2－2)、(2－3)、(2－4)、(3－2)、(4－2))は、差がない段階において習得が困難になっているものであるが、このことは、その段階にいる学習者が、習得できないまま長期間そこに留まる可能性を示唆していて興味深い。自らの外国語学習経験からも、ある段階までは達しても、その次の段階に上がるのがたやすくなく、またその段差が高いことを知っている。教師にとって、どの文法項目がどの段階で習得困難であるかの知識は、指導の際に役立つことと思われる。参考のために、今回

取り上げた各文法項目について、正答率が60%にはじめに達した段階を示し、段階別に項目を整理し表1として掲げておく。

今回の分析の作業から、集団間の段差の要因として、以下のような点が考えられる。

1）導入の時期

2）文法項目の重なり度

3）学習機会の有無

〈表1〉正答率が60%以上に達した文法項目の段階別リスト

初級 ←→ 上級			
G 4	G 3	G 2	G 1
有名(な)人	見(に)行かない	～(に)とって	がんばら(な)きゃ
これ(で)いい	そこ(で)何をしてる	人(に)教えてもらった	グリーン(の)スカート
中(に)何入ってんの	君の(せ)いで	そう(だ)と思います	新聞(に)出てた
聞いた～彼(に)	行っ(た)って	そういう(ふ)うに	そのぐらい(に)して
〈倒置〉	寝ちゃっ(て)さ	窓(の)ところ	子ども(に)なんか
～(に)は会いました		大事(な)用	東京(ほ)ど～ない
		コーヒー(の)おいしい店	出かけ(よ)うとしたら
		はって(あ)ります	終わりそう(も)ない
		～に(し)たがって	忘れ(て)た
		～の(に)	(ご)連絡します
		～(と)いっしょに	アルバイトっ(て)いえば
		せんたく(と)かはします	～人(が)田中さんです
		～(わ)けです	書く(こ)とにしよう
		～した(も)のの	～とは(か)ぎらない
		～す(べ)きだ	60(だ)し
		外国人(の)あなた	色(が)変わったら
		～ていただ(け)ませんか	～ていうの(を)
		就職した(か)らといって	茶色(に)見える
			えらそう(な)こと
			～て(い)く一方だ
			どのように～(か)が
			何～(か)と思ったら
			思った(よ)り
			～なん(て)思ったり
			問題(で)ありまして
			どこ(か)行かない

1）は、ある段階ではその文法項目がまだ導入されていないためにできないということ、2）は、個々の文法項目は習得していてもそれらが複数重なった場合に理解できないということ、3）は、その文法項目が教授シラバスからもれているということである。

今回の分析は初めての試みでもあり、テストにあたって不備な点が多々あった。今回の反省点を挙げ、次回のテストへの課題とし、また同時にそれを踏まえて、より多くの文法項目を網羅したテストを作成し、それぞれの項目の習得の段階を明らかにしたいと思う。

1）文法項目の選定に際し、一つの項目でも、単独の場合、他の項目との組み合わせ（また、その組み合わせ方も文法項目の難易を考慮して行なう）の場合で習得度の違い、習得の段階が分かるように問題を工夫する。

例えば、正答率が極端に低かった、56.「この調子なら、おれどんどん読めちゃいそう。」を例にとると、「おれ.....読めちゃいそう」の部分では、「～そうだ」でも「おれ（話し手）の動作＋～そうだ」、可能形、縮約形が組み合わさったものであり、それらに加えて、「この調子なら」、「どんどん」などの表現も障害になっているかもしれない。一つ一つは初級の文法項目であるが、それらが組み合わさった場合高度になってくる。どの組み合わせが困難であるかを見るためには、①可能形のみ、②「～そうだ」のみ、③「～そうだ」の縮約形のみ、④「おれ（話し手）の動作＋～そうだ」、そしてそれぞれの組み合わせというように、いくつかの問題を用意する必要がある。

2）今回は文法項目がどのような習得のされ方をするかを見るという試験的なもので、各集団間の正答率が同比率で上がっていかない場合を、大差ありとみなして、大まかに分類したが、厳密には差の検定を行ない、有意差があるもののみをとって分類する必要がある。

注

1）プレースメントテストには文法の他、読解、聴解、語彙、漢字（各30点満点）の5つのテストがある。

2）データベース（d－BASEⅢPLUS）を利用し、学生の解答をパソコンに入力して正答とマッチングさせて集計する方法をとった。ただし「～(ん)じゃない」を「～(の)じゃない」と書くような表記の違いは正答とすることにし、パソコンで処理したものを筆者らの目で再度チェックしていった。この方法により、正誤の数量だけではなく、どのような聞き間違いをしているのかが一覧で見ることができる。

3）水谷（1980）は、初級文法項目が組み合わさった場合、困難になることを指摘しており、またフォード（1992）は聴解のディクテーションからその「誤聴」分析をしている。

参考文献

1．小林典子・フォード順子（1992）「文法項目の音声聴取に関する実証的研究」『日本語教育』78号　日本語教育学会

2．フォード順子（1992）「聴解ディクテーションの「誤聴」分析－中•上級の文法の困難点を探る－」『日本語教育論集』7号筑波大学留学生センター

3．水谷信子（1980）「中・上級の話しことば教育」『日本語教育指導参考書7　中・上級の教授法』国立国語研究所

4．日本語教育学会（1991）『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社